【559】

氏　　名　吉田喜久子（よしだ きくこ）
学位(専攻分野)　博　士　(文　学)
学位記番号　論文博第370号
学位授与の日付　平成11年7月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　宗教と詩の源泉　――直接経験と言語的場――

論文調査委員　(主査)教授 長谷正當　教授 薗田　坦　教授 藤田正勝

論文内容の要旨

本論文は，人間に於ける直接的な経験としての宗教経験を経験の言語的場という問題との関わりにおいて論じたものである。本論文は二部に分かれているが，第一部から第二部への展開は，この主題に対応している。

第一部のマイスター・エックハルトのキリスト教神秘思考をめぐる研究は，したがって，キリスト教に内在的な立場からではなく，エックハルトの思想を宗教的直接経験の問題として究明するという観点から為されている。ただし，エックハルトの思想が特定の精神的・文化的伝統のなかから生まれたものである以上，それが立脚するキリスト教に固有な概念や思惟を明らかにすることにも周到な注意が払われている。エックハルトのキリスト教神秘思想は，キリスト教の枠の突破であると同時にキリスト教の固有性の成就であるという二面性を有するが，この二面性はエックハルトの思想が最も直接的な経験に立脚するものであるということに由来する。第一部の全五章は，具体的には次の諸問題をめぐって構成されている。

第一章。中世キリスト教にとって，神についての第一の規定はエッセ（esse）であり，神の絶対的なエッセが，中世キリスト教の全体系を支えているといってよい。この意味で，中世有論としてのアナロギア論は，最も中世キリスト教的な問題を論じたものである。トマス・アクィナスの場合，そのアナロギア論の性格は，必ずしも明確ではないのに対して，エックハルトの神秘思想の主題に繋がってゆく顕著な傾向性を示している。

トマスとエックハルトのアナロギア論の性格の違いは，両者に於いてエッセを問題にする仕方の違いから来ている。トマスの場合には，エッセは，その膨大な体系を支えるものでありながら，エッセそれ自体の問題は，少なくとも私達にとっては明らかにされていないのに対して，エックハルトの場合には，神のエッセの絶対性が追求されるという仕方で，エッセの問題が顕在化しているといえる。エッセの絶対性の追求に関して，エックハルトに，所謂ドイツ的徹底性を見ることは可能だが，それと同時に，エックハルトの場合，キリスト教的エッセの絶対性の追求を促進する役割を果たしているのが，新プラトン主義的概念なのである。

新プラトン主義的「一性」は，エックハルトに於いて，エッセの絶対性が，神学的に追求される際に援用されているばかりではない。エックハルトの神秘思想に於いても，神と人間の魂との「一」は，神の一性に基づいて成立するが，この一性は，新プラトン主義的「一者」の一性に極めて近い。

第二章。エックハルトに於ける新プラトン主義傾向を明らかにする為に，プロティノス，プロクロス等の新プラトン主義が，「一者」と「ヌース」，「魂」の三つのヒュポスタシスの問題を中心に考察される。

第三章。エックハルトに新プラトン主義からの影響が見られることは明らかであるが，エックハルトの神秘思想には，新プラトン主義的神秘思想を更に一歩進めたといえるところがある。エックハルトに於いてこの問題が集約して現れているのが，エックハルトに於ける神の三一性の問題であり，これは，エックハルトの新プラトン主義的傾向を考える際，最も大きな問題となる事柄である。即ち，エックハルトに於いて神の一性は，新プラトン主義的「一者」の一性に極めて近い。新プラトン主義的「一者」の一性とは，多性の否定，従って一切の差異性と関係性の否定を意味する。これに対して，キリスト教の神が三一神と呼ばれるのは，その一性が，「三」という差異性と関係性と切り離しえないからである。従ってここで当然問題となるのは，エックハルトのようなキリスト教神秘思想に於いて，神の三一性はどのように考えられているかというこ

とである。この問題の解釈は，解釈者の立場によって大きく分かれていて，一定の結論は出ていない。

新プラトン主義的一性と両立し難いキリスト教的三一性の問題を，エックハルトに於いては如何に理解しうるかという問題について，本論文は，キリスト教の基本的立場から，即ち，三一性の mysterium（玄義）はキリストの mysterium を通してのみ近づきうるという立場から，考察を試みている。第三章では，先ずエックハルトに於けるキリストの mysterium 論が考察されている。

第四章と第五章では，キリストの mysterium を通した三一性の mysterium は，エックハルトではどのように捉えられるかという問題を考察し，エックハルトの神論に於ける新プラトン主義的一性と，キリスト教的三一性とをめぐる解釈に，或る方向が示される。そのことを通して，エックハルトの思想に於いて，キリスト教の枠の突破が，キリスト教の固有性の成就にもなっているという解釈の可能性が示される。

エックハルトの思想に対して，神学的な細かい議論を続けることは無限に可能であるが，中心的な問題は，以上取り上げた事柄に収斂してゆくことは，その後のエックハルト研究を見ても，明らかである。ただ，残された大きな問題があるとしたら，それは言葉の問題である。「言葉」或いは「御言葉」の問題は，キリスト教神学と信仰にとって最も大きな問題の一つであるが，エックハルトの場合には，そこに，エックハルト自身の発する言葉，ドイツ語説教という言葉の問題が加わってくる。本論では，言葉の問題は，キリスト教に固有な「言葉」の問題としてよりも，人間の経験と，その言語的場という問題として追究される。そのことによって，キリスト教や浄土教等，初めに言葉を置く宗教に於ける言語の問題に立ち還る道が開かれる。

「実在の経験と言語的場」と題して第二部では，第一章に於いて，第一部との問題関連の中で，宗教経験と言葉をめぐってどのような事柄が問題であるかが明らかにされる。その際，宗教の態度を「信仰」，「認識」，「体験」の三つにわける西谷啓治の宗教類型論において，キリスト教神秘思想が，「体験」の中の「信仰」の立場とされている考えを援用した。西谷の論は，宗教に於ける特殊と普遍，人格性と非人格性，神中心と人間中心等の，宗教内在的な問題の立て方で展開され，神秘思想は，いまだ「普遍的なるものを特色の普遍としてのみ見る」態度であるのに対して，西谷の立脚する禅宗の立場こそ，「普遍性に立脚する唯一の宗教」であり，「体験」の中の「体験」の立場ともいうべき「体験そのものの純粋性」に立つ唯一の立場であるという結論が導かれる。

しかし，一定の宗教的立場からではなく，人間に於ける経験の問題として宗教を考えようとする本論文は，エックハルトのような神秘思想が，「体験」の中の「信仰」の立場であるところに，「体験」と「信仰」の両方の宗教的立場で主張される経験と言葉の問題が現れていると見ることができるのではないかという方向に，考察を展開させる。そしてこれは，第二部の主題となる，経験と言語的場という問題に繋がってゆくのである。このことをより明らかにする為に，ここで，エックハルトの思想を直接に問題とすることから離れて，先ず第一章で，西谷の分類による「体験」と「信仰」のそれぞれの立場に於いて，宗教経験と言葉の問題はどのように考えられているかをまとめ，それが以下の章とどのような繋がりにあるかを示した。

第二部の中心をなすのは，第三章から五章までであり，ここで最も多く考察の手掛かりとしたのは，本居宣長の思想である。第三章では，「物のあはれ」論として展開されている経験と言葉の源泉をめぐる問題を考察し，それが或る原初的な宗教性に通じていることを示そうとした。宣長の「物のあはれ」論は，「物のあはれ」とは何かを論ずる感情論ではなくて，「物のあはれをしる」とは何かという，一種の認識論ともいうべきものであるが，それは，また宣長の経験論であり，宣長の場合，経験論は同時に言語論である。

現代の科学技術の問題を論じた第二章は，元来はこの第三章の一部を成していたものである。何ゆえ，ここに科学技術論を敢えて挿入したかといえば，現代という科学技術の支配する時代にあっては，直接的全体的経験と言葉の回復が必須の条件ではないかということを考えたかったからであり，また，それは，宣長の思想が現代に対してもちうる一つの意義を示唆することにもなるからである。この章で扱ったハイデッガーのラディカルな技術論が明らかにしたのは，技術支配の下で起こっている最大の問題は，人間も含めた全てのものが，有用性という視点でのみ存立を許されていて，物がその物たりえていないということである。しかし，ハイデッガーの場合，その技術論は，彼の西洋形而上学観と不可分の関係にあり，技術の危険からの救いは，世界の歴史が「回転する」ことによってのみ可能である。

ハイデッガーと異なり，科学技術の問題を，西洋形而上学の内部に留まる問題と捉えないで，人間に於ける経験の問題と

して考えたのが，ベルクソンである。ベルクソンによれば，近代科学がその力を発揮しえたのは，多くの点で，経験の領域を小さくするという代償を払うことによってであった。直接的な全体的な経験を回復する為には，生物として有用な行動の必要性に迫られて，通常は，制限されている私達の知覚を拡大させ深化させることによるほかないというのが，ベルクソンの考えである。ハイデッガーは，技術についての省察も，技術との対決も，かつては同じく τεχνη という名前で呼ばれていた「芸術」の中で起こるに違いないと示唆するだけであるが，ベルクソンは，知覚を拡大深化が現実に可能であることを私達に示しているのが，芸術家の表現であると考える。

ベルクソンが，「イマージュ」という言葉で暗示した直接的な知覚経験，芸術家に起こる拡大深化された知覚経験，これを宣長は，『古事記』という神話の世界に見，それを，わが国の上古には「たゞ物にゆく道」があった，という言い方で述べている。

第四章は，ベルクソンの哲学的方法との，或る種比較思想的叙述方法によって，宣長の言語論の最大の特徴が，言葉を言葉たらしめている言葉の創造的表現性をめぐる言語論であることを明らかにしようとした。宣長が，『古事記』という神話の世界に見た「たゞ物にゆく道」は，「物のあはれをしる」道の，一つの純化された形を示しているが，神話という直接経験の世界は，言葉の表現性に捕らえられる経験と別ではなかった。

言葉の表現性に，言葉の本質的問題を見る宣長の言語論は，詩的乃至神話的言語に，有用性から自立した言語の表現性が現れているのを見る。しかし，それは，詩的言語以外の言語を，言語の頽落態と見做す言語論ではない。言葉の表現性が，他の何物からも説明することのできない，言語本来の力である限り，言語の表現性は，挨拶のような，最も日常的な言語生活をも貫いている。

ベルクソンの場合は，言葉の表現性を哲学的概念にもたらすことを，その哲学的方法にしようとしたといえる。

第五章。私達の経験は言語的な場を持っている。この場は，必ずどこかの国の国語という言語組織，「言語伝統」であり，具体的な歴史と文化の中で形成されてきた「世界観」を表している。この章は，このような問題と関わっている。

宣長は，『古事記』撰録という事業を，日本語という国語にとってのみならず，その後の日本文化の歴史にとっても，異常に重い意味を持つ特異な事件であると考えている。日本は，口頭言語から内発的に文字が誕生する以前に，漢字漢文を受容し，原初的な宗教経験から，自然に教理や教義が育ってくるのを待たないで，外来宗教を受け入れるという歴史をもった。『古事記』の趣旨が，古語のままに古伝を記すところにあったということは，『古事記』撰録者には，言語の本質についての明らかな自覚があったことを物語っている。詩の本質を詩作した稀な詩人であったとするが，ハイデッガーのヘルダーリン解釈であるが，日本は，国語という次元で，言葉の本質への反省が起こるという歴史を持った。この反省は，漢字漢文という異言語との出会いがなければ，起こりえなかったが，漢字漢文渡来以前の日本人の言語経験が，言葉の本質の経験であった，つまり私達が神話世界と呼ぶ，詩的言語経験であったということによるほかない。

同様に，外来文化，外来宗教の受容から，徐々に「日本の形」を作り上げていったのも，それ以前の長い期間に神々の祭儀という仕方を通して培われていた日本人の宗教性が，基本的なところでは完成していたからである。

言葉の本質の自覚が，国語という言語伝統，国語という世界観の問題として起こったということが，その後の日本文化の歴史に対して，如何なる意味を与えたか，宣長が考えたのは，そういう問題である。

論文審査の結果の要旨

本論文は，詩と宗教の源泉を人間に直接的な経験に求め，世界経験と言語経験とが重なりあう直接経験が詩の源泉であると同時に宗教の源泉でもあることを明らかにしたものである。全体は二つの部分からなり，第一部において論者は，中世ドイツの神秘思想家エックハルトの思想を取り上げ，その神秘思想が認識や信仰を超え出た体験に立ちながらも如何にして信仰神秘主義として捉えられるか，また，その信仰神秘主義において言葉がどのように理解されているかを，キリスト教の神学と直接経験の側とから考察する。第二部では，論者は日本の本居宣長の思想を取り上げ，歌人にかぎらず凡ての人間にもっとも基本的な「もののあわれ」の経験に潜む知を言葉との関わりから追究する。このように，異なった精神的・文化的伝統のもとに立つ二人の思想家を取り上げた論者の考察は，いわゆる比較思想の観点からではなく，思想が成立してくる手前の直接経験に立ち帰って，そこで言葉が如何に生じ，そして言葉によって如何に経験が形成されるかを究明し確証するという意図からなされている。人間に直接的な世界経験と言語経験との結び付きを言葉の表現性ないし創造性という観点か

ら，異なった伝統のもとにある二人の思想家において究明したところに本論文の意義と価値がある。

エックハルトのキリスト教神秘思想研究はこれまで，新プラトン主義との関わりをめぐって，また，正統や異端の問題をめぐって，限りなく錯綜した神学上の議論を積み重ねてきた。論者はエックハルト解釈をめぐるこれらの議論に立ち入って，エックハルトのキリスト教思想の固有性を明らかにする一方，それが立脚する直接経験の立場を掘り下げてゆく中で，それまでの宗教内在的なエックハルト解釈において取り残されてきたものとして言葉の問題を取り出して，それをキリスト教に固有な言葉の問題を超えた視野にもたらし，言葉を人間の直接経験との関わりという観点から究明することで，キリスト教にかぎらず，仏教の浄土教など，初めに言葉を置く宗教における言語の問題を究明しうる場を開いている。

またエックハルトの『ドイツ語説教』は，これまでキリスト教の枠の突破か，キリスト教の固有性の成就であるか，という問題の中で解釈されてきたが，論者はこの著作の解釈を，言語の表現性という別の問題へと移し，エックハルトの神秘思想がラテン語著作においてではなくドイツ語著作において初めて表現可能であった所以を探って，フィヒテのいわゆる「生きた言語」の表現性・創造性の問題をそこで究明している。論者のこのような視点は，これまで神学的・形而上学的議論の中に閉じ込められてきたエックハルト研究に新しい視野を開くものとして高く評価される。

第二部では論者は，本居宣長の「もののあわれ論」を取り上げて直接経験と言語の表現性の問題を追究する。そこでの論者の関心は「もののあわれとは何か」を論じる感情論ではなく，「もののあわれを知るとは何か」という認識論にあって，「あわれという感慨を離れずに働く知」を意識化し自覚化することのなかで開かれてくる全的認識を，人間が生きるということとの関わりにおいて追究している。ある一つの原理によって高所から一切を説明しようとするごとき「理」の立場はなお自己主張を貫こうとする我意と我執を秘めた立場であって，そのような我意を秘めた「不動心」を排して「ものにふれて心が動くという経験」にこそ人のこころのおのずからなるありよう，「まごころ」を見るとする宣長の実在感の叙述は，論者の共感と重なりあっていて美事に展開されている。

また，実在の実在的経験とその自覚としての言葉の問題は宣長の思想の中心の問題であること，もののあわれを知る道は詠歌でもあって，実在に深くふれるという経験は，宣長においては言葉の問題と切り離しえないこと，宣長が『古事記』において見た「ものにゆく道」，『源氏物語』に見た「もののあわれへの道」は日本人の心の根幹をなすものであって，日本文化の根幹に見いだされたそのような詩人の魂は宗教の出でくるところでもあること，これらのことをハイデッガーの詩論やベルクソンの知覚論とも重ね合わせて追究した論者の叙述も的確であって，高く評価される。

言語の表現性の特質の究明を主題とした本論文において殊に注目すべき点は，宣長が『古事記』編纂という事業が日本語という国語にとってもつと考えた重い意味を論者が再確認して，そこから引き出している帰結である。日本は，口頭言語から内発的に文字が誕生する以前に漢字漢文を受容し，原初的な宗教経験から自ずと教理や教養が育ってくるのを待つことなく，外来宗教を受け入れるという歴史をもったが，『古事記』編纂の趣旨が，古語のままに古伝を記すことにあったということは，『古事記』の撰録者には言語の本質についての明らかな自覚があったこと，表意性を強い特色とする漢字漢文に対して表音性を基本とする日本語の固有性への自覚と反省があったこと，そしてこの自覚は漢字漢文との接触によって初めて生じたものであったという指摘は，他方で，エックハルトの神秘思想の表現がラテン語著作において不可能であり，ドイツ語著作において初めて可能であったという論者の論述とも照応して，言語の表現性の特質を示したものとして，意義深いものがある。

なお，第二部の第二章に入れられているハイデッガーとベルクソンの科学技術論は，「もののあわれ」や言語の表現性を論じた本論文の内容とはやや異質の感もあるが，西欧形而上学の中心に潜む技術の問題は「物を物として守ること」を荒廃させるものであるとするハイデッガーの考えは，現代においてもののあわれを知る道が置かれた位置を明らかにするものとして，本論文の根本的な意図を示唆する重要な一章となっている。

しかし，本論においてなお望まれる点が残されている。それは，エックハルトにおける神秘的体験と言葉との関連の問題の展開が，キリスト教神学内の議論に比べてなお十分ではなく，第二部においてなされたような徹底性にまで至っていないという点であって，その展開は今後の課題として残されている。だが，このことは宗教の源泉としての直接経験と言語の創造性を論じた本書の意義を減じるものではない。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年5月22日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。